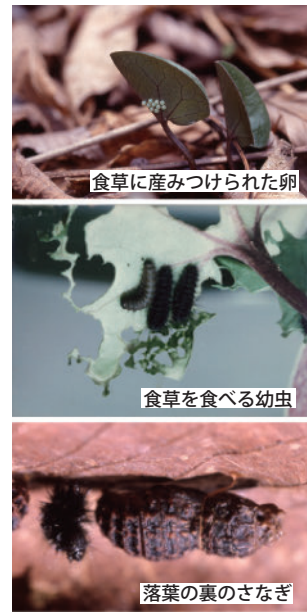




飯田市天然記念物のギフチョウ（成虫）



食草に産みつけられた卵

食草を食べる幼虫

落葉の裏のさなぎ

ギフチョウとは？

年に一度だけ桜の開花期に飛ぶ小型のアゲハチョウ。日本固有種（本州のみ）で、氷河時代からの形質を残すと言われる貴重なチョウ。里山の雑木林を棲み家としている。自然の豊かさを示す「指標生物」の一種で、ギフチョウがいればそこは自然が豊かだというバロメーターでもある。近年あちこちで絶滅が叫ばれているなか飯田市は平成元年にギフチョウを「飯田市天然記念物」に指定した。



食草移植作業



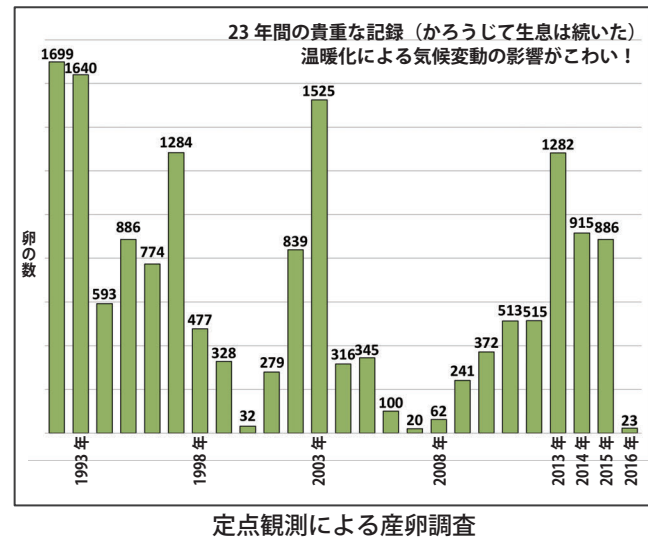
ピオトープでの地元小学生の野外環境教育を指導

ギフチョウ絶滅の危機

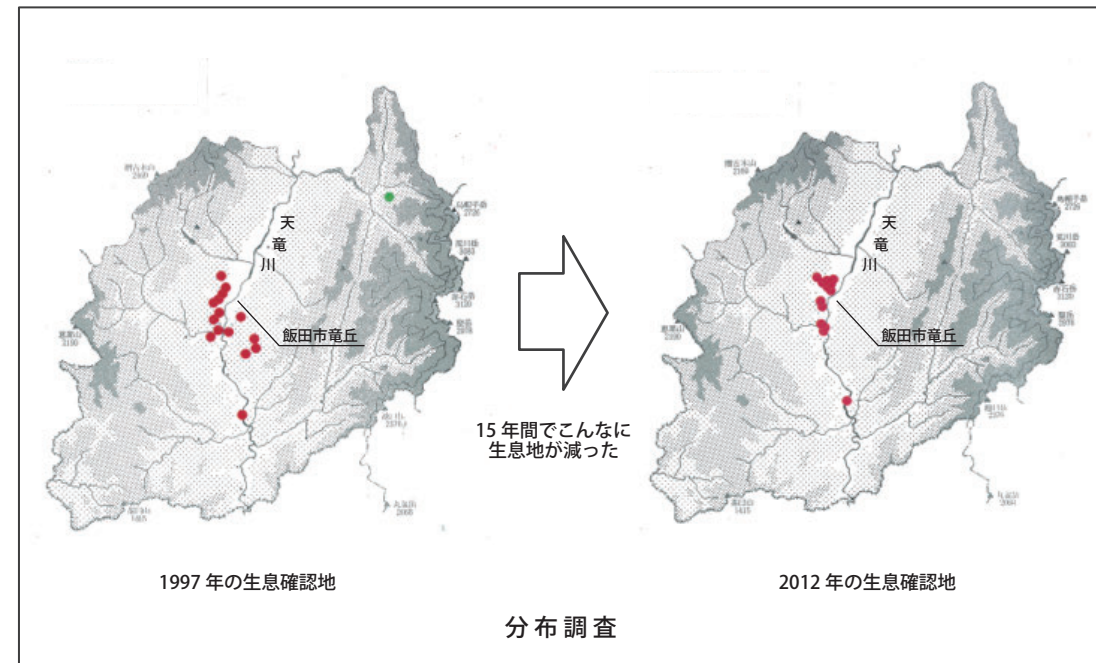
下図の分布調査に見られるように南信地方ではたった 15 年間で、これだけの生息域がせばめられている。また、右の産卵調査結果からは、1993 年 2003 年 2013 年と 10 年毎にピークを迎えるものの、やや漸減状態の右肩下がりであることも分かる。全国的にも同様で、一部では絶滅しつつあるとさえ言われる。食草のヒメカンアオイ類が局所性であること、温暖化が要因と思われる激しい気候変動（ゲリラ豪雨を含む）の影響と思われるが特定はできない。一つ一つの生息域の面積をせばめられないことが大切かと思われる。その意味からも地域ぐるみの保護活動はこれからも重要である。



老人会による保護監視活動



「飛んでいるギフチョウを見る会」も 40 回を数えた



活動部門

まちづくり全般

- ・森・林・水・生態系などの自然資源の保全と活用
- ・環境・教育及び教育普及活動の支援

飯田市天然記念物 ギフチョウの保護活動

保護活動のあらまし

1982 年に起こったギフチョウの乱獲をきっかけに発足した「飯田昆虫友の会」の呼びかけで始まった地域ぐるみの活動。これには「乱獲」と「大開発」の二つのピンチがあった。

●ギフチョウの乱獲に対する活動

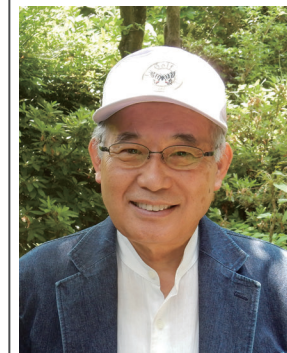
全国から突然押し寄せた乱獲者に対して、「保護看板立て」や「保護監視活動」で対抗。地元の老人会が山中にテントを張って見張ってくれた。

●「大開発」に対しては地域ぐるみでの運動

昭和 36 年の天竜川大氾濫の治水事業でギフチョウの棲み家であった雑木林が切られ、盛り土のための掘削が公開になり、ギフチョウの「お引越し作戦」が必要となる。地元の小中学生、老人会、婦人会、PTA、各種団体の人海戦術によって 5 年間で 5000 株の食草「ヒメカンアオイ」の移植を行った。成功やに思われたが、やはり、「次善の策」ではあった。

●その後の評価

これらの地域ぐるみの活動は、「環境省ふるさといきものの里」・「飯田市天然記念物」の指定と、「第 5 回ムトス飯田賞」の受賞へとつながった。



応募代表者：松下 重雄

有限会社 みずゞ設計・代表取締役

（公社）日本建築家協会・フェロー会員

伊那谷の森で家をつくる会・運営委員

飯田昆虫友の会・事務局

南信州文化財の会・会員

伊那谷研究団体協議会・事務局

第二次世界大戦がはじまる 1941 年東京に生まれ、母の郷里飯田に疎開して昆虫少年時代を過ごした私は、その後 70 年続いた平和のありがたさや、ありのままの自然の大切さを次代に継承すべく、環境建築と生態系保全に取り組んでいます。